

研究課題	ライブストリーミングを活用した「ゼロ距離海外交流」を可能とする教育の実践
副題	～日本にいながらにして海外文化を擬似体験する～
キーワード	異文化交流 オンライン配信 英語教育
学校/団体名	公立京都市立堀川高等学校
所在地	〒604-8254 京都府京都市中京区四坊堀川町 622-2
ホームページ	http://www.edu.city.kyoto.jp/hp/horikawa/

1. 研究の背景

新学習指導要領から、英語における「即興性」、「やりとり」がより重視されるようになった。本校では、英語の授業で生徒のそれらの力を養成するだけではなく、例年一年次に実施される海外研修においてもそれらの力を養成することを目指してきた。実際に海外に行くことで、それまでの英語学習の成果を確認したり、異なる文化に住む人々と交流ができたりと、本校生徒にとっての海外研修は、一般的な「旅行」とは異なるものであった。しかしながら昨年度は、新型コロナウイルスまん延の影響を受け、例年行われてきた海外研修は中止となってしまい、海外へ行き、英語で現地の人々と交流を行うという機会は失われてしまった。代替の活動として、FripGridという動画共有が可能なプラットフォームを使用して、アメリカ・ボストンにある高校と動画投稿を通じたやりとりを行ってきた。具体的には、生徒がサイトに1分程度の動画を投稿し、その動画に対して他の生徒がコメントを記入、あるいはリプライ動画を投稿するというものであり、時差などを気にしなくてもよいという利点があった。しかし、生徒に聴取したところ、動画作成にあたっては話す内容を時間をかけて考え、投稿までに何度も練習したとのことで、本来の海外研修では行っていた「外国語を用いた即時的なやりとり」とは程遠いものになってしまった。そこで、校外に足を運び自分たちの住む地域についての紹介、ガイドをライブ映像でできたら、今年度抱えていた「即時性」という課題は解決し、さらに、昨今よく企画される、Zoomなどを利用した単なるテレビ会議の域を超えたものができるのではないかと考えたのが、この研究に取り組むに到った背景である。

2. 研究の目的と目標

本校の海外研修の目標（令和2年度のもの）は、①「外国語での積極的な対話と異文化交流を通じた柔軟な思考力を養う」、②「飽くなき探究心を育み、学び続ける姿勢を養う」、③「『自立する18歳』に向かって自ら考えて行動する力を養う」の3つである。これら3つを生徒たちが日本国内にいながらも、ICT機器を活用することで達成することが本研究の狙いである。よって、ガイドツアーを通して屋外で歩きながら英語で即時的なやりとりを行うことで、擬似的に海外研修を体験することを活動の目的とする。本校生徒がツアーを提供することになるため、本来の海外研修とは少し異なってしまうが、まずはこちらがツアーを提供し、今後交流校にも同じ形でツアーを提供してもらうということを視野に入れている。例年、海外研修は、日本で計画を立て、事前学習を行ったのち、現地へ行って学習するという流れで実施されてきた。ICT機器の活用によりその事前学習をより充実させることが可能であり、また1か国に限らず、数か国を対象とし、

例年行われてきたものに極めて近い形で、擬似的な海外研修を行うことができると考えた。上で述べた3つの目標を達成するために、本研究での活動が効果的かを明らかにしていくことが研究の目的である。

3. 研究の経過

表1は、本研究の取組概要、評価のための記録をまとめたものである。また各活動の目標は、「2. 研究の目標、目的」で述べた本校の海外研修の目標（令和2年度）と同じとする。

目標：①「外国語での積極的な対話と異文化交流を通じた柔軟な思考力を養う」

②「飽くなき探究心を育み、学び続ける姿勢を養う」

③「『自立する18歳』に向かって自ら考えて行動する力を養う」

時期：2021年7月～2022年1月

対象：京都市立堀川高等学校生徒数名

交流校：St. Paul's Primary Catholic School (香港),

Kamnoetvidya Science Academy (KVIS) (タイ)

表1 研究の経過

時期	活動内容	評価の方法
7月6日	生徒募集開始	
7月14日	キックオフミーティング	
8月25日	① 第1回ワークショップ (with 香港) ・自己紹介, 学校紹介 (校内ツアー), 日本文化紹介	ふりかえりノート 観察, 教員からのコメント
10月18日	② 第2回ワークショップ (with KVIS) ・自己紹介, 学校紹介, 日本文化紹介	ふりかえりノート 観察, 教員からのコメント
11月17日	③ 第3回ワークショップ (with KVIS) ・オンラインクッキングレクチャー ○本校HPに活動の様子を掲載	ふりかえりノート 観察, 教員からのコメント
12月16日	③ 第4回ワークショップ (with KVIS) ・Language Exchange	ふりかえりノート 観察, 教員からのコメント
1月30日	⑤ 第5回ワークショップ (with KVIS) ・オンラインガイドツアー in 二条城 ○本校HPに活動の様子を掲載 6ヶ月のふりかえり	ふりかえりノート 観察, 教員からのコメント

4. 代表的な実践

本研究での活動の目的は、第五回ワークショップ（表1の⑤）をもって達成されるが、生徒はそれまでのワークショップを通して、英語での「即興性」「やりとり」に慣れていくことになる。

(1) 第1回ワークショップ with 香港（表1の①）

第1回目のワークショップとして香港の生徒と、自己紹介、学校紹介、異文化交流を目的としたオンライン交流を行った。初回ということもあり、英語でのやりとりに慣れることを目的に計2時間の交流を行った。内容は、パワーポイントなどを使用した簡単な自己紹介、アイスブレイク、学校紹介、それぞれの国の文化紹介である。活動環境は、教室に1人1台ノートPCを準備してオンライン会議に参加するというものであった。デバイスを持ち歩くことはなかったため、通信環境などに問題は特になかったが、オンライン会議を使用して2時間も英語でやりとりをするということに生徒は不慣れであったため、会話がうまく続かず教員が英語の内容を本校生徒に教えたり、交流相手からの質問へ教員が答えたりと、コミュニケーションにおける課題がいくつか見つかった。また、プレゼンテーションのためのパワーポイントの作成に関しても、拙い部分があり、文字が見つらいというような課題が見つかった。

(2) 第2回ワークショップ with KVIS（表1の②）

第2回ワークショップは、2校目の交流相手（KVIS）との初めての顔合わせの際に行った。内容は第1回ワークショップとほとんど同じである。相手に分かりやすく伝えるにはどうしたらよいか、相手が知りたい情報は何かを生徒の中で考え、それらの反省を生かして第2回に臨んだ。

第1回との違いは、校内ツアーを行ったことである。第2回ワークショップの段階では、カメラやそれに必要なグリップなど、歩きながらの生配信に必要な機器が揃っていなかったため、ポケットWi-Fiと生徒のデバイスを使用した。ここでの大きな課題は、カメラを持つ手がぐらついていてしたことにより、配信映像が不安定であったことである。また、第1回ワークショップで課題となったコミュニケーションにおける課題に関しては、英語を自分たちで話そうとする、理解しようとする姿勢は前回よりも見られたが、ツアーをすることに集中しすぎて、一方向のやりとりが続いてしまうという新たな課題が見つかった。ワークショップ終了後には、最後の活動としてのオンラインガイドツアーを成功させるためにはどのように課題を解決したらよいか、生徒の中でふりかえりを行った。

(3) 第3回ワークショップ with KVIS（表1の③）

第3回目ワークショップはタイKVIS校との2回目となる交流となった。第二回でお互いの文化に関するQ&Aにて、食についての質問が多かったことから、クッキング交流を行なった。KVISの生徒がタイの伝統料理 BUALOY（白玉団子がココナッツミルクに浮かんでいるもの）を作る様子をライブ配信し、本校生徒はそれを見ながら同時に調理室で同じものの作成を試みた。



図1 第三回ワークショップの様子

英語での説明を聞き取り、同じものを作成しようとしたが、同じ材料を使用したにも関わらず全く違う見た目のBUALOYができてしまうなど、英語でのやりとりの難しさを再度痛感するとともに、オンライン会議を用いた交流の幅を広げることができた様子だった。第三回ともなると、

生徒のオンライン会議に対する緊張もなくなっており、KVIS 生徒とのやりとりもスムーズに行えている様子であった。

(4) 第4回ワークショップ with KVIS (表1の④)

第4回ワークショップも、第2回のQ&Aで出た生徒の興味をもとにLanguage Exchangeを行うこととなった。クイズ形式での講義、実際の言語活動を日本語、タイ語の両方を用いて行い、お互いの言語文化の理解を深めるよい機会となった。

(5) 第5回ワークショップ with KVIS (表1の⑤)

第5回ワークショップは、本研究の主たる活動でもあるオンラインガイドツアーである。場所として、本校から徒歩10分で行くことができる元離宮二条城を選び、オンラインガイドツアーを行うための準備を1ヶ月ほどかけて行った。実際にガイドを行うとすれば、どの情報は必須でどの情報は省くことができるのか、実際に現地にKVIS生徒がいるとすれば、どのような部分に疑問を抱くだろうかなど、様々なシミュレーションを行い本番に臨むこととなった。

当日は、二条城を5つのパート(入り口、唐門、二ノ丸御殿、庭園、清流園)に分け、各パートにクイズ、説明、Q&Aを設けてガイドを行った。第2回ワークショップで行った学校紹介ツアーでの反省を生かし、カメラの使い方を練習してから本番に臨んだことで、映像のグラつきは抑えることができた。また、新たに購入したカメラとカメラグリップを使用したことで、ライブ配信として満足いく映像を届けることができた。これまで出てきていたコミュニケーションにおける課題に関しては、ガイドの途中でも相手とのコミュニケーションを積極的に取るなど、一方向のコミュニケーションではなく常に双方向のコミュニケーションを取ることができていた。

ガイドツアーの終わりには、半年の活動のふりかえりをKVIS生徒、本校生徒一人一人が行い、両校の教員からは半年間の活動のフィードバックも行われた。



図2 第5回ワークショップの様子(Zoom画面)

5. 研究の成果

ここでは主に本研究のメインの活動となる第5回ワークショップ、生徒に対して実施したアンケート、生徒の観察をもとに研究から得られた成果をまとめる。

(1) 目標①「外国語での積極的な対話と異文化交流を通じた柔軟な思考力を養う」の分析・検証

参加生徒のコミュニケーションに対する姿勢は、第1回、第2回ワークショップの段階で様子を見る限りはそれほど積極的なものではなく、教員のサポートのもと英語で会話をしたり、交流校の生徒が積極的に本校生徒に話しかけたりというものであった。しかしながら、表2の最終活動後に生徒を対象に実施したアンケートの記述に「英語を話す際に文法や単語が間違っていないか気にしてばかりで、話すことができないのはもったいないということが分かった。」とあるように、最後のワークショップの段階では、英語でやりとりをするという困難を克服し、教員のサポートなしで交流相手とコミュニケーションをとり生徒のみで活動することができた。また、同表より「自分の国についてもっと知ることができた。」とあるように、異文化交流を通して、

また、毎回のワークショップで様々なテーマに沿って行った日本文化の紹介のために多くの時間を費やしたこともあり、生徒の日本文化に対する理解も深まっていることが分かった。活動回数が計5回しかなかったこともあり、柔軟な思考力を養うことができたかどうかの判断をすることは難しいが、異文化を理解するということから今までになかった思考を行うことができたのではないかと推察できる。

(2) 目標②「飽くなき探究心を育み、学び続ける姿勢を養う」の分析・検証

第1回、第2回ワークショップの時は、予定されていた通りにワークショップの準備を進めて、本番も予定されていた通りのタイムスケジュールに沿って実施した。約半年間の活動の中で、計5回のワークショップを行ったが、第3回以降は教員側からのテーマの提供ではなく、生徒が自らの興味に基づいてテーマ設定を行った。第3回はそれぞれの食文化についてのQ&Aがテーマであった。第2回ワークショップの時に交流相手と食文化の話で盛り上がり、生徒がお互いの食文化についてもっと知りたいと思ったため、このテーマ設定に到った。第4回のテーマである言語文化に関しては、初回ワークショップから毎回お互いの言語に関する質問が飛び交っていたためである。例えば、「～に行く」「～をする」といった日常生活に必要な簡単な内容の言葉をお互いに聞き合っていた。よって、第4回では、しっかり時間をとってワークショップとして言語文化をテーマとすることになった。ワークショップのテーマ設定に関わらず、毎回のワークショップにおいては、予定されていなかったQ&Aセッションが行われるなど、知りたいと思った瞬間に交流相手に質問をするという姿勢も見られた。これらのことから、生徒は自らの「知りたい」を交流の中で見つけ、それを知ろうとする、学ぼうとする姿勢を養うことができたのではないかと考える。

(3) 目標③『自立する18歳』に向かって自ら考えて行動する力を養う』の分析・検証

まず『自立する18歳』とは、本校の最高目標として掲げられている理念であり、「生きていくための知識・教養に裏付けられた判断力と行動力を備え、人や社会と関わりあう中で育まれる想像力と創造力を活かし、自他の存在や価値の尊さを感じつつ、自己実現を図ろうとする生徒」という本校生徒が目指す生徒像である。この目標に関しては、半年間の活動の中で行ってきた生徒の様子の観察から分析をしていく。この目標の達成の判断は、様々な観点から行う事ができるだろうが、その中でも、表2にいくつか述べられているようなスケジュール調整に関する部分の成長からも、参加生徒が「自立する18歳」に向かっていっていることが判断できると考える。活動開始間もなくは、生徒は問題なくスケジュールを組み、それに従って活動を進めていたが、委員会活動やその他学校での活動が活発になってきてからは、予定していたスケジュール通り準備が進まず苦しんでいる姿をよく見た。しかしながら、アンケートにもあるように、余裕のある生徒が忙しい生徒の仕事を請け負ったりすることで、チームとしてスケジュール通り準備を進めていくことに成功していた。この姿から、本校生徒が団体としてものごとを進めていくコツを掴んだことが分かった。これ以外にも、ICT使用スキルの向上、英語力の向上、英語でのコミュニケーションにおける成功や失敗など、活動の中での様々な経験が、今回本活動に参加した生徒が「自立する18歳」に向かう上で活かされることを願っている。

表2 生徒アンケートの回答

<p>1. 活動を通して学んだことを、これからの日々の活動でどのように生かしていくか、どのように発展させていけるかを、考えて言語化してみよう。</p> <p>○日本文化を改めて調べることで、自分の国についてもっと知ることが出来た。今回の活動で、より自分の英語力を試していきたいという思いが強まったので、コロナ禍ではあるけど海外の人々と関われる方法をまた探していきたいと思う。(生徒A)</p>
<p>2. 活動における問題点を書いて下さい。</p> <p>○少し時間に余裕がなかった。学校生活(テスト・委員会・スタッフ活動)との両立が、一年生たちには厳しそうだった。交流の回数は多い方が楽しいので、兼ね合いが難しい。(生徒A)</p> <p>○活動の予定が決まるのが、直前になることが多かったので活動の事前準備を十分にすることができなかった。(生徒B)</p>
<p>3. 問題点をどのように解決していったか</p> <p>○私は比較的スケジュールに余裕があり、その分スケジュールが厳しそうなメンバーの手助けをした。また、限られたスケジュールの中でできることを考えて役割分担をし、結果的にそれぞれの出来ることを掛け合わせてよい形で活動ができた。(生徒A)</p> <p>○自分たちだけで解決策を具体的に見いだせたわけではないが、お互いに協力することでプロジェクトを成功させることができた。(生徒B)</p>

6. 今後の課題と展望

表2にもあるように、生徒が感じたこの活動における問題として、時間に余裕がなかった、部活や委員会活動などの学校生活との両立が難しかった、というものが挙げられる。もともとのスケジュールでは、ワークショップをより多く行ったり、活動報告を学校全体に向けて行ったりと、予定されていたものがいくつかあったが、様々な委員会活動が盛んである本校では、それらに加えてこの活動を行うことは少々難しかったことが活動の中で分かった。その中でも時間を見つけて話し合ったりするなど、生徒自身で課題を克服することができたが、今後同じ活動をする上でより詳細な予定をより事前に考えておく必要があるだろう。

また、評価の基準を作る必要があるとも考える。半年間生徒の様子を観察することで生徒を評価することは可能であるが、ループリックに基づいて行うことがより効果的だと考える。相手校との交流、またオンラインガイドツアーは今後も続いていくため、今年度の生徒をひとつのモデルケースとして、来年度の活動に向けたループリックの作成を行っていく予定である。

7. おわりに

本研究を進めるにあたって、多くの方に協力をしていただいた。本年度は、St. Paul's Primary Catholic School (香港)と Kamnoetvidya Science Academy (KVIS) (タイ) の両校に交流相手としてこの活動に参加していただいた。また、第5回ワークショップでガイドツアーの場所とした元離宮二条城のご担当者様においては、本校生徒の事前学習のためにガイドをしてくださるなど、大変協力的にサポートをしていただいた。ここに感謝の意を表す。